カール・バルト――彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その１２の２）

（その１２の２）カール・バルト自身の＜ただイエス・キリストの名だけ＞ということ

（文責・豊田忠義）

（その１２の２）カール・バルト自身の＜ただイエス・キリストの名だけ＞ということ

バルトは、『カール・バルト　和解論Ⅳ　キリスト教的生断片』「はしがき」で、「キリスト教的生の基礎づけとして」、「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものである、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事としての「**神の和解の業に対応する自主的性格を持つキリスト者の（人間的！）業**」――すなわち、「神御自身のわざとしての聖霊による洗礼とリタージカルな**人間の業としての水による洗礼**」、「さらに……『**主の祈り**』**に手引きされてキリスト教的生の様々な実際的姿の呈示**」、「最後に、……**その自己犠牲におけるイエス・キリストの現在**〔その十字架の死を包括した「**キリスト復活四〇日**（使徒行伝一・三)」としての「成就された時間」、「まことの現在」〕**に答え彼の将来**〔**復活されたキリストの再臨**、終末、「完成」〕**を待ち望みつつなされる感謝としての聖晩餐**についての教説が、記されるはずであった」と述べている。この思惟と語りは、常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意という「人間の局面」は、「全くただキリスト論的局面だけである」ということを前提としたそれであるのであって、「神人協力説」へと向かうベクトルを持った自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階におけるそれではない。「和解論を締めくくるキリスト教倫理の冒頭に述べられた洗礼」、「今日では、非常に好んで、そして非常にしばしば（あまりにも好んで、そしてあまりにもしばしば)、**神に対して成人になったと称する世について、語られている。**〔しかし､〕……そのような世よりも**私にとって興味があるのは、神と世に対して成人に＜なるべき＞人間である**」、ちょうど「まことのイエス・キリストの教会」が、実体ではないから、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、教会＜となる＞ことによって教会＜である＞ことを目指すところに成立するように。

そのような訳で、**バルトにとって興味**があるのは、「神人協力説」へと向かうベクトルを持っている自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教を包括し止揚し克服した、それ故にキリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類

比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚した＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持している、**そうした「成人のキリスト者と成人のキリスト者の群れ**である」。「神に対して活きた希望を懐き、世において奉仕し、自由な信仰をし、絶えず祈る、彼らの思惟、言説、行動である。そして、私の考えでは、**霊と火による洗礼**において起こるのは、そのようなキリスト者また教会として責任を負うことの解放の開始であり、**水による洗礼**において起こるのは、そのような責任遂行へとキリスト者また教団が歩き始めることである」。これらのことから、「**嬰児洗礼の風習ないし悪習に対する……反対という結果が生じてくる**」。しかし、この「問題のある嬰児洗礼（この「風習ないし悪習は、新約聖書によっては基礎づけられず、ようやく三世紀以降に認められるもの」である）に関する問い」は、「特に、古い神学的自由主義の代表者たちに対しても、その『歴史的・批判的』方法の新発見を大声で自慢している最新の神学的自由主義の代表者たちに対しても、向けられている」にも拘わらず、自由主義国家が近代主義国家のことであるのと同じように、神学における自由主義者・近代主義者である彼らにおいては、「神とその現実存在の三一性に至るまで、すべてのものが、そこでは『非神話化』され得るのに、この問題に関しては、彼らを森の中の最も深い沈黙のようなものが支配している」、彼らは、聖書に根拠づけられていないこの問題に関しては、真剣に取り扱おうとはしない。「私は、この嬰児洗礼の問題においてある種の突破が起こることによる全面的な恢復を、教会に期待してはいない。しかし、教会がすべてのより良い知識や良心に反対して、千何百年来そうして来たように、かたくなに**洗礼の水をあのように恐れげもなく乱費することを続ける限り、教会がどうして**、今日いろいろな方面から言われているように……その本質にふさわしく伝道的教会（したがって成人せぬ教会ではなく**成人した教会**）**であり得るであろうか**」、「教会が、神に対しても教会自身の使信に対しても、また外面的あるいは内面的に『壁ノ外ニ』いる人々に対しても、責任を負い得ないそのような仕方で、教会の人的構成の後継ぎについての心配を、静めることができると、かたくなに考えている限り、**どうして教会が、他の世の人々に対して、信用できるものであり得るであろうか**」、「**この改革を回避することに固執しようとする限り、最上の教会論も、われわれにとって、何の役に立つであろうか**」。このように、バルトは述べている。イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられるのは、＜信仰＞の認識としての神＜認識＞である、啓示＜信仰＞としての啓示＜認識＞である、＜信仰＞としてそのように自覚された＜認識＞である。したがって、バルトは、人間中心主義における「人間学の後追い知識」として「『歴史的・批

判的』方法の新発見を大声で自慢している」神学的「自由主義者・近代主義者」たちにおいては、「神とその現実存在の三一性に至るまで、すべてのものが、そこでは『非神話化』され得る」にも拘わらず、「嬰児洗礼（この「風習ないし悪習は、新約聖書によっては基礎づけられず、ようやく三世紀以降に認められるもの」である）に対して、彼らには沈黙のようなものが支配している」と根本的包括的に原理的に批判しているのである。第二次世界大戦後において、「私は教会のなかに、破滅に急ぎつつあった一九三三年当時と同じ構造、党派、支配的傾向を見出した」、「公然たる信条主義や教権主義、およびいろいろ賑やかな姿で現われている典礼主義への興味によってよびおこされた関心を見出した」、「私は、前よりももっと明瞭に人間――キリスト者もまた、そして**キリスト者こそ！――がもともと頑な**であり、**容易に悔改めに導かれえない**ということを認識したのである」（『バルト自伝』）。イザベラ・バードは、『日本奥地紀行』で、明治期の「日本人たちを見て感じるのは堕落しているという印象である」、「わが西洋の大都会に何千という堕落した大衆がいる――彼らはキリスト教徒として生れ、洗礼を受け、クリスチャン・ネーム名をもらい、最後には聖なる墓地に葬られるが、〔善悪・道徳の観念、高度な宗教をもたない〕アイヌ人の方が〔人間的に〕ずっと高度で、ずっとりっぱな生活を送っている」、と揶揄している。

因みに、ヘーゲルは、人間学的領域における『哲学史序論―哲学と哲学史―』（岩波書店）で、次のように述べている――「人間は本来、理性的であると言えば、人間は素質の形で、萌芽の形で理性を持つことを意味する。この意味において**人間は理性、悟性、想像、意志を生れながらにもつ**。（中略）**しかし子供**〔あるいは自然を原理とする人類史におけるアジア的段階の人間〕**は**、このような理性の能力〔自由な論理的合理的体系的な思考能力〕、あるいは**その可能性を単にもつというだけであるから、理性をもたないのと同じである**。そして**それ故に、自由でもないのである**」、「すべての人間が本来、〔生来的に自然的に〕理性的であり、そうしてこの**理性的ということの形式こそまさに　自由だということである**……（中略）一方**アフリカ民族およびアジア民族と**、他方**ギリシャ人、ローマ人および現代人との唯一の区別も**また、（中略）**後者が自由であることを自分で知っており、それを自覚しているのに**〔それを認識し自覚しているのに〕、**前者は彼らもまた自由であるにかかわらず、それを知らず**〔それを認識し自覚しておらず〕、**自由なものとして実存しないことなのである**」。人間中心主義における「人間学の後追い知識」として「『歴史的・批判的』方法の新発見を大声で自慢している」神学的「自由主義者・近代主義者」たちは、人類史における尖端的な西欧的段階に現存しているにも拘わらず、バルトの根本的包括的な原理的な批判を認識し自覚していないのである。当然にも彼らは、そして彼らだけでなくバルト主義者も反バルト主義者も中立主義者も、そうした神学者や牧師やキリスト教的著述家たちも、ミシェル・フーコーの「時代を画する哲学者〔思想家〕は一人もおりません」と

いう「西欧の合理性の歴史の危機」、「西欧思想の危機と帝国主義の終焉」、「革命という西欧概念の危機、人間、社会という西欧概念の危機」について、全く認識し自覚していないのである。言い換えれば、彼らはすべて、これまで述べてきたように、現存する現在の問題、現在を止揚する問題を明確に提起することができないのであるから、前へと歩みを進めることができないことは、明らかなことなのである。もっと言えば、そのこと自体についても認識し自覚していないのであるから、前へと歩みを進めることができないことは、明らかなことなのである。したがって、彼らは、教会の宣教の一つの補助的機能としての神学に対して、バルトのように聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として最善最良の神学を構成しようとするのではなく、常に、いつまでも、ただ「人間学の後追い知識」として「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの神学」の構成を、それに類する神学の構成を、自然神学の構成を続けるだけに違いないのである。

エルンスト・ヴォルフの「六〇歳記念論文集への寄稿」文で、「ブルトマン主義者たちが、神の救済行為の『私ノタメニ』の要素を強調しているのを見て」、バルトは、「**『ワレワレノ外ニ』という基本的な前提が破棄されずに**」、換言すれば神の側の真実としてのみある主格的属格として理解されたローマ 3・22、ガラテヤ 2・16 等のギリシャ語原典「イエス・キリスト**の**信仰」（イエス・キリスト**が**信ずる信仰）による「律法の成就」・「律法の完成」そのもの、すなわち「神の義、神の子の義、神自身の義」そのもの、それ故に成就・完了された個体的自己としての全人間・全世界・全人類の究極的包括的総体的永遠的な救済（この包括的な救済概念は、平和の概念と同じである）そのものである、その死と復活の出来事における「**イエス・キリストのみ業**」**という前提が破棄されずに**、個人救済としての「『私』（私ノタメと私ノ中ノ）の代わりに、『われわれ』（**ワレワレノタメニとワレワレノ中ニ**）**について語られ**」「**保持されている**」**のであれば、その点を「手掛かりとして徹底的に話し合える**」と考えた。**何故ならば**、自己自身である神としての「失われない単一性」・神性・永遠性を本質とする「三位相互内在性」における「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方（働き・業・行為、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）である、この**復活に包括された「十字架のイエス・キリストこそが、神に選ばれたお方である」からである**。言い換えれば、われわれ人間は、「そのままでは恵みを受け取る状態にはないし、また自分でそのような状態にすることもできない」のであるから、「もし人がその恵みを受け取り得たとすれば、そのこと自体が恵みである」のであり、「私たちの召命・義認・聖化」は、「神人協力」へのベクトルを持つ目的格的属格として理解されたローマ 3・22、ガラテヤ 2・16 等のギリシャ語原典「イエス・キリスト**の**信仰」（イエス・キリスト**を**信ずる信仰）によって「私たち自身の中に生起するのではなく」、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある「イエス・キリストの御業として、私たちのため

に、私たち自身の中に生起する」からである（『カール・バルト著作集 3』「神の恵みの選び」）。

1962 年の**『福音主義神学入門』について、バルトは**、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返し最後的には人間学が第一次的になり人間学にのみ込まれてしまうところの人間学と神学との混合学、人間学的神学、哲学的神学、キリスト教的哲学等「**『哲学混合神学に対する断固たる拒絶を、論述した』ものと考えた**」。

教会の宣教（その一つの補助的機能としての神学）における過渡的課題と究極的課題との全体性という往還思想を持たない「シュヴァイツァーのような、神学的にはきわめて問題のある神学者」も、「神学の対象の側から見るならば」、その実践が「祝福され、きよめられたものとなるのかどうかということは神ご自身の決定事項である」し、またその実践は往相的な問題から見るならば意味があるだろうと述べた（マタイ 26・6-13、マルコ 14・3-9）。

バルトは、自分自身の生涯を閉じる「しばらく前に、……ある手紙に次のように書いた」――「私が、楽な死を迎えるか、それとも苦しんで死ぬかはどうしてわかるでしょうか？　私が知っているのは、ただ私の死もまた私の生に（≪ある歴史的現存性のただ中に生誕し、時代と現実に強いられて、ある資質を持ち、職業を持ち、喜怒哀楽し、思惟し、思想し、意志し、想像し、生き生活した人間の個の時間性、個体史、自己史、「全生涯」に≫）属している……のだろうということです。……その時私は――これこそがわれわれすべての運命であり、限界であり、目標であるのですが――もはや存在しないでしょう」。何故ならば、人は死ねば、その時にはもはや自分は存在しないのであるから、人は**自分の死を体験することができない**からである。こう述べたバルトは、終末論的信仰において、「だが私はそこでは」、「キリストの裁きの前で」、「私の全生涯において、その全生涯によって」、全体的に「努力放棄者として」、「まさにただ……彼〔**イエス・キリスト**〕の約束によって、義トサレタ罪人として立ちうるでしょう」と書いた。

1962 年 3 月 1 日、76 歳のバルトは「最終講義を行い、……引退生活にはいった」。バルトにとって、「**老齢者**」は、「**キリスト教の見地から言えば**、……いかに強くとも、いかでか頼まん。やがて朽つべき、人のちからを。**われと共に、戦いたもうイエス君こそ**……（「讃美歌 267 番、ルターの「神はわがやぐら」）**と歌って**……**生きることを許されている**」「**素晴らしいチャンスを与えられている**」**者のことであった**。

バルトは、引退直後に「七週間アメリカ大陸に出かけた」。シカゴでは、「イエズス会士、ユダヤ教のラビ、自由主義プロテスタントの神学者、正統的プロテスタントの神学者、それに一人の信徒が参加した」パネルディスカッションに出席した。この討論に参加したバルトは、もし自分がアメリカの神学者ならば、「ヨーロッパに対してのあらゆる劣等感」、また「アジアやアフリカに対する……優越感からも解放された自由な神学」、それ故に個体的自己としての全人間の「人間性へと」完全に開放された「自

由の神学を、つくり上げようとするだろう」と考えた。言い換えれば、時流や時勢に乗った＜エコロジー＞神学、＜フェミニズム＞神学、＜解放＞神学、＜民衆＞神学から解放された自由な神学、すなわち「**ただイエス・キリストの名だけ**」**によって自由にされた個体的自己としての全人間の「人間性へと」完全に開放された「自由の神学を、つくり上げようとするだろう**」。＜エコロジー＞神学には、次の点が欠けているのである――すなわち、経済社会構成の拡大・高度化、科学・技術の進歩・発達、その知識の細分化と増大、生活の利便性の向上、これらが＜良きもの＞であれ＜悪しきもの＞であれ自然史の一部としての人類史の自然史的過程における自然史的必然としての自然史的成果であるということである。そうである以上、現存する環境問題は、倫理的に法的政策的に遅延させることはできても解決することはできない問題であるから、すなわち本質的には科学的・技術的な問題であるから、国、企業、また資産家（ビル・ゲイツはそのことを実践している）がその資金を提供するという仕方で、科学的・技術的に解決していく以外にない問題である。その極限に天然自然主義を想定できるエコロジー神学には、この視点が全く欠けているのである。また、＜フェミニズム＞神学、＜解放＞神学、＜民衆＞神学には、次の点が欠けているのである――すなわち、権力は実体ではないという認識と自覚が欠けているのである。「私の立場は、経済的な社会構造の発展〔また、科学や技術の進歩・発展、その知識の細分化と増大、生活の利便性の向上〕を自然史的過程〔自然史の一部としての人類史の自然史的過程〕として理解しようとするものであって、**決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするものではない**。個人は、主観的にはどんなに諸関係を超越していると考えていても、社会的には畢竟その造出物にほかならないものであるからである」（マルクス『資本論』「第１版の序文」）。したがって、**観念の共同性を本質とする制度**としての資本家の子供も**現実的な市民社会生活、個別的私的具体的な生活**においては労働者であり得るし、逆に**観念の共同性を本質とする制度**としての労働者の子供が**現実的な市民社会生活、個別的私的具体的な生活**においては資本家であり得るのである。したがってまた、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、ある歴史的現存性のただ中に生誕し、その現実的な社会の中である具体的な職業をもって具体的に生活せざるをない以上、阪神・淡路大震災の時、＜**正義のため**＞あるいは＜**隣人のため**＞ということである牧師が「武器を持って神戸市役所かどこかに押しかけて行って、被災者の住めるような建物をすぐにつくってくれと、〔一切全く責任のない弱い立場の〔**隣人である**〕一般公務員の〕職員を**脅かした**」ことは、そしてさらにそのことをわざわざ吉本隆明に電話して「**得々としゃべること**」をしたということは、弱い立場の人のためになした行為でもないし、弱い立場の人に対する奉仕の行為でもないのである、その行為は、ただ無知で横暴な恥ずべき行為でしかないのである。したがって、吉本自身、牧師がそのことを「得々としゃべること」を聞いていて次第に怒りが爆発寸前にまできたということを書いてい

る。優れた言葉と思想の専門家の吉本ならば、そのような行動の駄目さ加減をすぐに見抜いてしまうであろうということが、その独りよがりの牧師には全く分からないのである。また、キリスト者ではない私の友人が、あるキリスト教的慈善家の講演を聞いた感想として、すべてではないと思うのだが、そういう慈善の優等生の慈善家は、往々にして、自分の関わる慈善事業に関わらない人間に対して、上目線で横暴な説明や発言をするというように述べていた。また、実体的な「政治組織の典型としての国家やその機構」について解明しようとしたのではないミシェル・フーコーが解明したように、「権力は実体ではなく」、それは、「個人間に存在するひとつの個的な関係タイプ」なのである。すなわちそれは、ある価値基準ある時ある場所において、「聖なる者」と「俗なる者」、「教えるもの」と「教えられるもの」、「正常なもの」と「異常なもの」、「支配されるもの」と「支配するもの」等へと**関係を規定する**ところの、「個人の生活を構成するいくつかの要素を発展させ」、「しかもそうした発展が同時に国家の力をも強化するようなやり方で発展させる」、「**政治的合理性の形態**である」（ミシェル・フーコー『全体的なものと個的なもの――政治的理性批判に向けて』）。＜フェミニズム＞神学、＜解放＞神学、＜民衆＞神学には、このことに対する認識と自覚が欠けているのである。また、確かに国家の暴力に対しては不可避的に暴力で対応する以外にないのであるが、過渡的問題としての観念の共同性を本質とする法的政治的な解放は人間にとって**部分的な解放**の問題に過ぎないから、その問題は、究極的問題としての観念の共同性を本質とする国家の無化を伴う個体的自己としての全人間の社会的現実的な**全体的な解放**の問題に包括されていなければならない。＜フェミニズム＞神学、＜解放＞神学、＜民衆＞神学には、この革命の総体像における後者の問題が明確に提起されていないのである。それらに対して、**バルトの言う「自由な神学」は、「ニューヨークの『自由の女神』が表している〔近代主義的、法的政治的〕自由を＜非神話化＞し、むしろ『御子』〔「ただイエス・キリストの名だけ」〕が与え給う自由に基礎を置く神学である」**。

ブッシュは、ここでも客観的な正当性と妥当性のある資料に基づかずに、それ故にキリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚して＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持しているバルトを看過して、「**人間性へと……開放された」という言葉だけ**を強調して使って、バルトが、いかにも自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教を目指しているかのような読み方ができてしまう記述の仕方をしている。このように、ブッシュの記述には、客観的な正当性と妥当性とを持っていない質の悪い資料〔本当は使うべきではない、もしも使うならばバルト自身による資料ではないという注を付記すべきである〕を使った、またバルト自身の神学の総体像に即して為されて

いない、人々を誤解させ誤謬させ曲解させてしまうような曖昧な記述が所々に散見されるのである。このような訳で、ブッシュの『カール・バルトの生涯』の記述を、特に**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄については、**決して「そのまま鵜呑みにしたり模倣したりすることをしない方がよい」のである。

アメリカ旅行から帰ったバルトは、様々な「宗教書や世俗の読みものを読んだ」が、「実存主義者たちのいつ終わるとも知れないおしゃべりに耳を傾けては、しばしば大きなあくびをした」。バルトは、「神学上の実存主義者たちの活動に対しては、……すでに以前から、いよいよただ吐き気と嫌悪を感じるだけだった」。このような「神学的状況全体のただ中で、**人々は**私に……敬意をはらって耳を傾けてくれるが、**結果として**……〔私が「書くようにして書いた」あるいは「話すようにして書いた」講演や主要著作の内容を〕**本当に聞き入れてはくれないのだから**」、すなわち敬意を払えども**その神学の総体像を根本的包括的に原理的によく理解してくれないのだから**、バルトは、**『教会教義学』の「続刊を書き続けることに没頭すべきかどうか迷った**」。

「全体主義世界と全体主義国家の中にある可能性」について、バルトは、「もともと国家は全体主義的国家のような性格をそれ自体として持っている」（自由主義国家、すなわち近代主義国家も、修正的資本主義国家も、現実的な社会をではなく観念の共同性を本質とする国家を第一義性・価値性とする＜国家主義＞的性格を持っている、ちょうど経済的基盤だけを資本主義に置く社会主義国家のロシアや中国が、観念の共同性を本質とする国家を第一義性・価値性とする＜国家主義＞的社会主義であるように）と述べてから、**制度**としての教会や**制度**としての牧師や**制度**としての神学者を中心としてそのまわりに集まる教会には**教会の可能性はない**と述べた。バルトは、「イエスのまわりに集まる教会」に、すなわちイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造に基づいてイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すところの教会に「一つの可能性がある」と述べた。

76 歳となったバルトは、一方で、老齢により多少まるくなる「知恵の根拠」は、「多少の老衰と独特な仕方で混じり合ったものにあるというように冷静に判断した」が、他方で、「人は老齢になり、回顧することによって、賢明で優しくなりますが、灰**の下でもなおくすぶっている火はやはり簡単に消してしまえない**ことも、私は経験しました」と述べている。

ヨセフスタールで開催された神学協議会で、バルトは、「ゲルト・フォン・ラートとの対話に喜んで加わり、……現在の旧約聖書神学が全体として、ほとんどまったく〔人間学としての〕**実存主義に汚染されていない**ことに対して」、**換言すれば自然神学に汚染されていない**ことに対して、「驚きを表明した」。

ラインラント州の青少年担当牧師たちとの対話において、シュライエルマッハーと同様に「ヘーゲルの強力な痕跡」を持っている「ブルトマン問題のために、激しい口論となった」時、バルトに「一人の若い人が……先生、あなたは歴史を築いてこられましたが、今やあなた自身もまた歴史になってしまわれました〔あなたの思惟と言葉も、著作も、自然時空に死語化してしまいました〕。しかしわれわれ若い者は、新しい岸辺を目指して出発しようとしているのです！」と述べたのに対して、バルトは「それは結構だ。それを聞いて私も嬉しいです。では、君の言う新しい岸辺について少し語ってくれませんか！」と返答したのであるが、その「若い人」は「残念なことにその岸辺について何も語れませんでした」と述べている。その「若い人」は、自分の無知を全く知らない・自分の無知を認識し自覚していない＜無知の人＞でしかなかった。まさにその「若い人」は、ヒヨコに過ぎなかった。この「若い人」は比喩としても考えられるのであって、その「若い人」に限らず、大人になっても自分の無知を全く知らない・無知を認識し自覚していない＜無知の人＞として、ヒヨコのままでいる知識人と自称する人はごまんといるのである、そういう人は商業的メディア的知識人の中に多くいる。

このような「多くの対話とインタヴューの中」で、バルトは、「**プロテスタント神学の現状について**」、「**神学上の虚栄の市だと感じ**」、「**貧弱な『偏平足の神学』だと思い**」、「**不信の念を表明した**」。そして、バルトは、「屋上のテラスでは……ティリッヒとブルトマン主義者たち」が、「人間学の後追い知識」としての、「神人協力説」へと向かうベクトルを持つところの自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教に属する「**問題のあるボンヘッファーの影といっしょになって荒れ狂っています**。そしてあわれなロビンソン司教は、〔大衆受けして〕二十万部売れた『神への誠実』の中で、これらすべてのものから空しい泡沫をすくいあげ、それを究極の知恵として――とにかくブルトマンには大変ほめられて〔ハイデッガーから、ブルトマン神学における神は、神としての神ではなく、「存在者レベルでの神」でしかないから、「それよりはむしろ無神論という安っぽい非難を受け入れたほうがよい」と「揶揄」された「人間学の後追い知識」としての自然神学者のブルトマンには大変ほめられて〕――売り出しました」、と述べている。ヘーゲルの「神の内なる人間、人間の内なる神という神人一体、神人和解の理念における宗教」と歴史哲学に依拠した〔「人間学の後追い知識」としての自然神学者の〕モルトマンに誰々は評価されたから、その評価された誰々は評価できると短絡的な思惟と語りをする牧師が、牧師として教会の宣教に携わっている。「まことのイエス・キリストの教会」を祈りつつ目指す牧師の仕事は大変な仕事だと思うから、そのような短絡的な評価をしている時間がるならば、教会の宣教の方へとベクトルを変容すべきであると考える。

さて、「特にプロテスタント神学内での討論において」、バルトに「聖書のテキストの理解に対する、したがって、『解釈学の』問題に対する問いが」発せられた。その問

いに対して、バルトは、「**その問題を主要な問題として、それだけを切り離して取り扱うならば、袋小路に迷い込むことになる**」と述べた。何故ならば、例えばブルトマンは、「同時代の人たちの思考の前提に対して」、「そこから形成された理解の規準に対して」「誠実と真実をささげる」ことを目指して、「新約聖書の釈義に役立つ新しい哲学的な鍵」を、前期ハイデッガーの哲学に基づく「絶対的規準としての先行的理解、解釈学的原理に見出した」のであるが、**その時には、起源的な第一の形態の神の言葉である**「他のすべてのものを基礎づけ、制約し、支配する**キリストの出来事としてのキリストの出来事**」**を**、「まさにイエス・キリストについての使信として、神と人間との間に起った出来事を内容としている」**第二の形態の神の言葉である**「（**新約聖書の**）**使信**」**から**「**取り去り**」、しかも「人間学の後追い知識」としての「容易に修得しえない先行的理解と言語」による自己認識・自己理解・自己規定、自己表現を「**第一次的なもの**」にし、**それ故に聖書を第二次的なものに変換**し、換言すれば**聖書をその**「**第一次的なものに従事することにおいてのみ真であり、重要であるものに変換し**」、「（**新約聖書の**）**使信を切りちぢめることにならざるを得ない**」からである。このように「第一次化すること自体」が、「自己自身の非本来的存在から本来的存在への」、「過ぎゆく存在から将来の存在への移行の歴史であり、信仰であり、説教である」とされる。ブルトマンは、まさに自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教としての＜人間＞宗教を、目指しているのである。この時には、その自己認識・自己理解・自己規定、自己表現は、彼自身の人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」でしかないから、ハイデッイガー自身から、客観的な正当性と妥当性とをもって、根本的包括的に原理的に「揶揄」・批判されてしまうのである（『ルドルフ・ブルトマン』）。バルトは、「『解釈学に関する緻密に入り組んだ無駄話』を嘲笑し、『神学市場に売りに出されている言葉の出来事という表現を聞くにつけ、私はそれの議論に注意してフォローしてきたのです（ついでにその出来事の最も騒々しい参加者を、私は……世界の国々の人々を集合させた庭園の飾り人形だと言ったものです)』」と述べている。また、バルトは、「われわれが〔第二の形態の神の言葉である〕**聖書の証言に出会うことが問題なのでなく、われわれが聖書の証言の中で証しされている方〔イエス・キリスト〕に出会うことが問題なのです**〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて**われわれが聖書の証言の中で証しされている方、イエス・キリストに出会うことが問題である**〕」。したがって、「われわれの祈りの中での働き」は、「聖書がイエス・キリストを証しして『いるのかどうか、またどこまで彼を』証ししているのかという問いをもって『歴史的＝批判的に読むことである』」が、その際、いかなる時にも、

「われわれが主導権をとってはならず」、すなわちイエス・キリストにおける神の自己啓示自身がその「啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）を持っているのであるから、「神の言葉の自由が……制限されてはならず、神の言葉の方に主導権がゆだねられなければなりません」と述べた。したがって、バルトは、「もちろん、われわれは誰でも、なんらかの存在論や世界観を頭の中に持っています。そういうこともまた禁じられているわけではありません。……ただし、われわれが聖書を読む時に、そういうものがわれわれが関わり合う最終の決定機関〔原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕であると考えてはならないのです」と述べた。

また、バルトは、「週刊チューリッヒ」誌の寄稿文に、「ベンゼの穏健な無神論も、東洋の粗野な無神論も危険ではなく」、「キリスト者の無神論的な実際の生き方こそが危険なのだ！〔神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もという不信仰・無神性・真実の罪に生きる生き方こそが危険なのだ！〕」、と書いた。「彼岸の消尽点が画の中に移され、神自身が人間の霊魂的な、また歴史的な現実の構成要素となり、従ってもはや神ならぬもの、偶像となる。これが特に危険な反乱であり、神への「反逆」である。その危険なわけは、それが、ごうまんにも神を忘れた公然たる反抗として行われず、実に神の名において〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者レベルでの神」の名において〕、〔その〕神の呼びかけのもとに〔その「存在者レベルでの神」の呼びかけのもとに〕行われるからである」（トゥルナイゼン『ドストエフスキー』）。

パウル・ティリッヒの最後の訪問に際して、バルトは、「今こそ回心して正道に立ち戻るべきだと警告したが、彼にはまったくそんな気持ちはなかった」。自然神学の段階で停滞するティリッヒは、「ヨハネ福音書一・一四のその言葉をあまりにも文字通りに解釈することに反対するとの見解」をバルトに述べた。

1965 年、バルトは、「『すべての人の人生には……陰があるのを』見た。『その重苦しい陰はまだ消え去ろうとはしませんし、おそらく神の御心によれば、まさに神に愛された者である、われわれ自身が神を愛し讃美することができるその場所に、われわれをしっかり結びつけておくために、消え去るべきではないのです』」と手紙に書いた。**誰にでも、もし出来得ることならば、今すぐにでも、完全に消し去ってしまいたい記憶や思い出がある。**

バルトは、「礼拝出席が次第に困難になるにつれ」、「よい日曜日の朝にはいつも」、「カトリックの説教とプロテスタントの説教を」ラジオで聞くようになった。

1966 年、E・ブルンナー逝去。この少し前に、バルトは、ブルンナーの友人に、「〔われわれの差異性のことは〕神にゆだねましょう！」、「大いなるあわれみの神が、

私たちすべてに恵み深い然りを言い給うことによって、私たちはいきているのだからです」と伝えてくれるように依頼した。

バルトは、「大西洋の此岸と彼岸で、栄光に満ちた実存主義の最後の最も美しい成果として出現した、馬鹿げた神の死の神学運動についての議論や精神的にも信仰的にも、ほんとうに召しも受けず、その能力もないのに、そこに飛び込まなければならないと考えた……信仰告白運動に関与する形ではないやり方で、一度神学の現状と取り組むことにした」。「信仰告白運動」に対して、バルトは、「聖書の証言にあるように、われわれのために十字架につけられ復活したイエス・キリストに対する君たちの信仰告白は正しい」と述べたうえで、次のように問うた――「その正しい信仰告白の中に、〔**時代と現実に強いられて、世界的**脅威である〕核武装に反対し、**アメリカの**ベトナム戦争に反対し、新しい**ユダヤ主義**に反対し等ということを含んでいるだろうか」、と。何故ならば、われわれは、「特定の人種、民族、国民、国家の特性、利益と折り合おう」としてはならないから、「ある特定の社会機構、あるいは経済機構」、支配機構の「保持、廃止に貢献しよう」としてはならないから、「西の獅子に全力をあげて抵抗しないような人びとは、決して東の獅子にも抵抗しえないし、また事実、抵抗しない」から――ちょうどラインホル・ニーバーが**宗教化・倫理化された西側イデオロギーに基づく「二者択一の倫理」、「賛成か反対かを強いる」＜「啓蒙の〝恐喝〟」＞**（ミシェル・フーコー『啓蒙とは何か』）によって、バルトに対して「なぜ、カール・バルトはハンガリー問題について黙っているのか？」と語り、バルトを「反共主義の味方に引きずり込むか、さもなければ、実はひそかな容共派であるという……正体を暴露するような形で、バルトの神学者としての信用を失墜させようとした」ように、また「人間の公私の生活においては、絶えず新たな支配が行われるような仕組みになっている」から、「国家は支配であり、文化は支配である」から、それ故に「どのような国家形態にも、どのような文化傾向にも、無条件に『然り』」と言ってはならないから、また「われわれは平和を維持するためにできる限りのことをしなければならない」が、「このことは、われわれは平和主義者でなければならないということを意味しない。平和主義は一つの絶対主義だ（すべての主義のように）。われわれは神には服従するが、一つの原理や理念にはしない」から、それ故に「われわれは最後の手段のために、〔戦争の元凶である民族国家が存在する限り〕戦争の可能性はあけておかなければならない」から――ナチズムの脅威に直面して、バルトはあくまでも相対的評価において自由および直接民主制と武装永世中立「スイスをナチズムからまもるために私は軍隊に参加し、両国を区分しているライン河にかかっている橋を護衛するために、もしもドイツのキリスト者の友人の一人が、その橋を爆破しようとしたら、私は射殺しなければならなかったであろう」から（このバルトの実践は、言葉としての説教と行為としての政治的実践を二元論的に対立させたところでのそれではなく、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配

者・標準とした、「かつて語った〔キリストの福音の〕説教の一貫した繰り返しが、（ある状況下において、その状況に抗するそれとして）おのずから実践に、決断に、行動になって行った」というそれである）。「もしそうでないのなら、その告白は正しいとしても、価値のある、実り豊かな告白であるとは言えないであろう」。このように述べるバルトは、先ず以て次のような思惟と語りを持ち堅持している――「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的な諸原理や理念や体制の内に求めようとしないで、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを、いっさいのものにまさって恐れ、かつ、愛すること、神を、大きな問題においても、小さな問題においても、彼がかってあり、いまあり、やがてあり給う権威のままに肯定し、是認すること、私たちの個人的、社会的生活を敢えて律して、すべての善きものを神から、神からすべての善きものを期待するべきである」、「福音が純粋ニ教エラレ、聖礼典が正シク執行サレルということがなされないままに」、「礼拝改革」、「キリスト教教育」、「教会と国家および社会との関係とか、国際間の教会的な相互理解というような領域で、何か真剣なことを企て遂行してゆくことができると考えるべきではない」（『共産主義世界における福音の宣教　ハーメルとバルト』）。

バルトは、「われわれの側からローマ・カトリック教会へ、あるいは逆に、向こう側からわれわれの教会への一つの改宗は、本来なんの意味をも持たない」と述べて、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造に基づいた「イエス・キリストへの、一つなる、聖なる、公同の、使徒的教会の主への」「良心的必然性をもった回心である場合にのみ、意味をもつ」と述べた。

バルトは、「カトリック教会の革新に対して、過大評価はしなかった」。「進歩派に対しても疑念を抱いた」。何故ならば、「あるカトリック教会が、あまりにプロテスタント的になり過ぎて」、「われわれが十六世紀以来犯してきた誤りを繰り返すような動向を見せた」からである――「教皇ピオ九世のことを考えてごらんなさい――若い革命家が簡単に年老いた反動主義者になったではありませんか！」。

1967 年、「いつの日か、……人は私が正しかったと言ってくれる日も来るであろうという思い」のもとで、『教会教義学　和解論』のⅣ／4、「キリスト教的生の基礎づけ洗礼論が出版された」。これが、『教会教義学』の最後の１冊となった。したがって、「要求の強かった」『教会教義学　救済論（終末論）』は未完に終わった。しかし、バルトは、聖霊に関わる終末論については、「すでにそれ以前に出版された諸巻から間接的に、あるいは一部は直接的にも読みとることができる」と考えた。

バルトは、例えば「神学の全体をまさに終末論へと上昇させてしまう『一直線の考え方』のモルトマンに対して、疑念を抱いた〔人類史は、その尖端性としての自由を原理とする西欧近代に向かって進歩・発展して行くというリニアな進歩史観を展開したヘーゲルの歴史哲学に依拠したモルトマンに対して、疑念を抱いた〕」。バルトは、

次のように述べている――「先行する他のもろもろの時代〔アフリカ的段階、アジア的段階〕のその問題意識にも……、真に耳を傾けることが出来るようになるために、われわれは、西欧近代を頂点とする歴史の直線的な進歩・発展というヘーゲルの進歩史観を、「直ちに全面的に放棄しなければならない」(『ヘーゲル』)。吉本隆明も、次のように述べている――人類、人間の類の時間性、人類史、世界史、歴史は、「文明の進展やエリート層への従属のために存在しているのではない」。したがって、大多数の被支配としての一般大衆、般市民、一般国民が、「歴史の主人公だとおもうためには、まだやること、創られるべき物語はたくさんあるのです。意識のなかの転倒、知識のなかの転倒、政治のなかの転倒をふくめて、すべてひっくり返さなければいけない反物語ばかりです」。「知は非知より優れていて」、「知識人が非知識人を導く〔大衆啓蒙、大衆迎合、外部注入論〕というようなかんがえ方は、絶対に転倒されなければいけない」(『大状況論』)。

バルトは、手紙に、次のように書いている――私の信仰・神学・教会の宣教における時代と現実から強いられた「私の著作は、単に私の研究からだけでなく、私自身との、さらに世界と人生の諸問題との、長く続いた、しばしば容易ならざる闘いとから生まれたことを考慮し、実践的に聞くという態度に参与しようと努力しつつ読んでくださることを期待します」、と。また、バルトは、「われわれは、天国においてはすべて必要なものを知るようになり、もはや一枚の文書も書いたり読んだりする必要はなくなるでしょう」(Ⅰコリント 13・8 以下)と手紙に書いている。

1967 年(81 歳)、バルトは、歩行も困難になる。

ブッシュは、ここでも客観的な正当性と妥当性のある資料に基づいてではなく、ブッシュ自身の恣意的独断的判断において、恣意的独断的な言葉で、次のようなことを記述している――ブルトマンとエルンスト・フックスから出発し『教会教義学』の「神論を全く新しい視点から取り上げようとした試論によって」「周囲からも期待」されたエーバーハルト・ユンゲルに対して、バルトは、「当時しばしば彼の所に訪ねて来た人との意見の交換において、彼を高く評価した」、と(この場合、ブッシュは、その会話の内容や評価の内容については、一言も述べずに、**意見交換時の＜その言葉だけ＞**を拡大鏡にかけて全体化して記述しているのである)。これは、全くの眉唾ものである、と私は確信する。何故ならば、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」(啓示の類比・信仰の類比・関係の類比)、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚して＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持しているバルトを看過してしか、このような記述は書けないからである。

ユンゲルの『神の存在　バルト神学研究』を読めば、誰が読もうと、この書は、まさしく「人間学の後追い知識」としての宗教哲学書そのものであること、自然神学そ

のものの書であることは明らかである。したがって、そのような、**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄についても誤解させ誤謬させ曲解させてしまう**ような曖昧な書き方をしている中立主義者・**ブッシュの＜立場**＞においては、客観的な正当性と妥当性とをもって、自然神学の段階におけるあるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階におけるキリスト教を、根本的包括的に原理的に批判したフォイエルバッハやマルクスやハイデッガーによるキリスト教批判を、根本的包括的に原理的に止揚し克服することはできないのである。

先ず以て、ユンゲンは、徹頭徹尾、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞に、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚したバルトとは、全く異なっていることは明らかである。そのことの証左の典型的な言表は、ユンゲルの次のような言葉である――「神学を表象の媒介のレベルから概念という高位のレベルにまで高めるという〔ヘーゲルの〕思弁的要求を何としても否定しなくてはならないようなことは、わたしにとって、神学を〔自由を原理としてリニアな進歩史観を展開したヘーゲルのような〕歴史哲学から何としても限界づけなくてはならないということと同様、**二次的なこと**なのである」（すでに先に述べたことであるが、バルトが「人間学の後追い知識」としての自然神学的なヘーゲルとの混合神学を目指しているモルトマンの方法を批判しているのに対して、ユンゲルはモルトマンの方法を容認しているのである）、「アブラハム、イサク、ヤコブの神を、たといこの神が幾何学的方法によって論証可能なお方ではないにせよ、**哲学者にとっても、思惟可能な神として信じるにあたいするというふうに思惟することはよい**ことなのである。ただ福音においてのみ言葉に言いあらわされる神を信じるとき人は哲学者であることをやめねばならないということは、よく分からない〔このらの言葉は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造というバルトの＜立場＞の否定である〕」。ユンゲルにおける神、啓示、信仰は、フォイエルバッハやハイデッガーが客観的な正当性と妥当性とをもって根本的包括的に原理的に批判しているように、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者」、彼の意味的世界・物語世界、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神への信仰」でしかないのである。そういうものを探究するとユンゲルは宣言しているのである。したがって、当然にも、その時には、「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、「（中略）神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。（中略）こうして、この対象に即

してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」ということになってしまうのである。

さらにユンゲルは、次のように述べている――「イエス・キリストにおいて神によって和解せしめられた世界には、……神の取り扱いを受けないような世俗性など全く存在しない」というバルトの神学的立場は、「近代的な自由および自律の意識の加工処理」、「近代的自律の神学的加工処理を認めている」、と言う。近代＜主義＞者としてユンゲルは、「神学的加工処理」の概念によって、人間学に対する神学の優位性を空想していると考えるのであるが、またユンゲルの近代的な「自由」・「自律の意識」は、一方で近代主義的な人間の自由な自己意識の無限性のことであり、他方で政治的近代国家における観念的な法的政治的自由の概念のことであると考えるのであるが、ユンゲルは、おそらくはその自由の概念を「神学的加工処理」をすることによって未完のその近代主義的概念の完成を空想しているのである。したがって、ユンゲルは、おそらくは、「神学的加工処理」の概念によって、「脱中心化された公共的意識」により百人百様の分裂と動態化を惹起させた西欧社会の中で、近代主義的法概念の再構成によって、法制的な共同体の統括力の回復を試みようとし、そのために憲法を法制的中枢とする法体系の中での、生得的に有する自然権である自由と平等（自己意識の対自性、理性としての個人・その主体的な関わり方）と、国民主権（自己意識の対他性、意思における普遍妥当的な相互承認と相互制約による共同性）との内的連関づけ、すなわち「討議によって産出されるコミュニケーション的権力」の構築によって「近代の未完のプロジェクトの完成」を目指した社会学者ユンゲル・ハーバーマスとの混合神学を目指しているのである。

そのような訳で、ブッシュの、バルトは「神論を全く新しい視点から取り上げようとした〔ユンゲルの〕試論を高く評価した」というその言葉は（それ故に、**意見の交換時の言葉でしかないその言葉**は、客観的なバルト自身の資料ではないのであるから、本当にこう言ったのか全く以て疑問であり、**眉唾物**であるが）、もしもそう言ったとするならば、その言葉は、**その根本的包括的な原理的な＜立場＞を「高く評価した」ということでは全くなくて、「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの」「すべての大学社会の神学**」、すなわち**ただ＜学業的知識＞として「高く評価した」ということでしかないであろう**。何故ならば、先にも書いたように、自然神学者そのものであるモルトマンを批判したバルトが、モルトマンのような自然神学者そのものであるヘーゲル主義者のユンゲンを＜高く評価する＞ということはあり得ないことである。このことは、全く自明的なことであるにも拘らず、ブッシュが、客観的なバルト自身の資料に基づかずに、意見交換時のその言葉だけを拡大鏡にかけて全体化して、「**高く評価した**」と記述した意図は、ブッシュが、バルトの秘書であったという立場を利用して、やはり、ひょっとすると大っぴらにではなく**密かに**われわれを近代主義的神学の方へと、近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の方へと、「神

人協力説」へと向かうベクトルを持っている人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の尊重と「人間学の後追い知識」を目指す自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の方へと導いていこうとしている点にあるかもしれないのである。メディアを利用した情報操作のようにも思えてくる。したがって、いずれにしても、われわれは、大学社会やその他の知識人の知識やメディア情報を「そのまま鵜呑みにしたり模倣したりすることをしない方がよい」のである。このような訳で、われわれは、それが「話すように書かれた言葉」であれ、「書くようして書かれた言葉であれ」、講演であれ、著作であれ、客観的なバルト自身のそれらの資料に即して自分自身で検証するということが大切なことなのである。

バルトは、「カルヴァンの聖霊論と信仰論を、彼の神学における最良の部分とみなした」。

バルトは『革新されつつある教会』という講演で、「もし革新されつつ生きることが教会の本質にかかわることでないならば……教会はもはや教会ではない」と述べた。言い換えれば、実体ではないところの「まことのイエス・キリストの教会」は、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、教会＜となる＞ことによって教会＜である＞というところに成立する（PDF 版＜イエス・キリストにおける神の自己啓示＞および＜その証明能力の総体的構造＞ならびに＜まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会＞を参照）。

1968年、バルトは、シュライエルマッハーの『宗教講話』をテキストとして、最終の「コロキウムを行なった」。バルトは、「『この十九世紀の（さらに二十世紀の、とも言えるかもしれないが……）教会教父』と対決し、対話しようと考えた」。ブッシュは、このことと同時に、ここでも、バルトは、「ヘーゲルの強力な痕跡を残している」近代＜主義＞的な自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教を育成したシュライエルマッハーを「烈しく批判したが」、「**彼から離れてしまうことはなく、しかも彼の問いを完全に卒業してしまうこともなかった**」、「それどころか、天国でのシュライエルマッハーとの『再会を、……ほんとうにたのしく思い浮かべ』」たというように、とてつもなく酷い誤解・誤謬・曲解のただ中で述べている。しかし、このブッシュの記述とは全く違って、バルト自身は、近代＜主義＞的神学者としての、換言すれば自然神学者としての「シュラエルマッハーにおける深い問題性としてある、聖霊論を**人間の側から論じた**」**シュラエルマッハー**を、すなわち「**聖霊論が人間学であるかの如く論じたシュラエルマッハー**」を、自らの＜立場＞において根本的包括的に原理的に批判しているのである（『教会教義学』「神の言葉」および「神論」）。例えば、『教義学要綱』や『バルトとの対話』においても、バルトは、次のように述べている――「聖霊は、人間精神と同一ではない」、「人間が聖霊を受けることを許され、持つことが許される場合、（中略）そのことによって、決して聖霊が人間精神の一形姿であるなどという誤解が、生じてはならない」、徹頭徹尾聖霊によって更新された理性も

聖霊と同一ではない、と。この思惟と語りは、**逝去した最晩年にバルトが執筆した、**「第三項の神学」(「聖霊の神学」)について論じた1968年の『**シュライエルマッハー選集への後書**』(**邦訳**J・ファングマイヤー『神学者カール・バルト』「**シュライエルマッハーとわたし**」)においても堅持され貫徹されている。このことは、その書を精読すれば、よく理解することができることである。

ブッシュは、ここでも、バルトを誤解し誤謬し曲解したまま、それ故に教会の宣教(その一つの補助的機能としての神学)にとって最善最良の神学を展開し構成したバルトを人々に誤解させバルトに迷惑をかけたまま、バルトは「**シュライエルマッハーから離れてしまうことはなく、しかも問いを完全に卒業してしまうこともなかった**」と記述しているのである。しかし、それは、とてつもなく酷い誤解・誤謬・曲解であって、それ故に**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄に関わる**とてつもなく酷い誤解・誤謬・曲解なのである。このことは何度も書いていることであるが、**最晩年の『シュライエルマッハー選集への後書**』(**邦訳**『神学者カール・バルト』「**シュライエルマッハーとわたし　1968年**」)において、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」(啓示の類比・信仰の類比・関係の類比)、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚した＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持しているバルトは、近代主義神学者、自由主義的神学者、まさに自然神学者そのものの**シュライエルマッハーに対する最後的な言葉として、次のような言葉を投げかけているのである**――「わたしは、〔「ヘーゲルの強力な痕跡を持っている」人間中心主義的なその〕**事柄そのものにおいて**、〔自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教へと向かう強力なベクトルを持っている〕**シュライエルマッハーと一致できないのだということを明言した**。(中略)わたしが**シュライエルマッハーを今までに理解した限り、自分は、彼のそれとは＜全く違った道＞に踏みこみ、それをあゆんでいかなければならないと思ったし**、〔最晩年の〕＜**今もそう思っているのである**＞」、と。ここまで論じてきて私には、ブッシュは、やはり、バルトの秘書であったという立場を利用して、大っぴらにではなく**密かに、**われわれを近代主義的神学の方へと、近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の方へと、「神人協力説」へと向かうベクトルを持っている人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の尊重と「人間学の後追い知識」を目指す自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の方へと導いていこうとしているように思える。何故ならば、『カール・バルトの生涯』の翻訳者が翻訳しているように、もしもブッシュが、本当に、バルトは、「ヘーゲルの強力な痕跡を残している」近代＜主義＞的な自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教を育成したシュライエルマッハーを「烈しく批判したが」、「**彼から離れてしまうことはなく、しかも彼の問いを完全に卒業してしまうこともなかった**」というように記述していたと

すれば、ブッシュは、**最晩年の『シュライエルマッハー選集への後書』**（**邦訳**『神学者カール・バルト』「**シュライエルマッハーとわたし　1968年**」）を全く精読し理解することなく、それ故に**シュライエルマッハーに対するバルトの最後的な言葉を看過して**――すなわち、**「事柄そのものにおいて**、〔自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教へと向かう強力なベクトルを持っている〕**シュライエルマッハーと一致できないのだということを明言した**。（中略）わたしが**シュライエルマッハーを今までに理解した限り、自分は、彼のそれとは＜全く違った道＞に踏みこみ、それをあゆんでいかなければならないと思ったし**、〔最晩年の〕**＜今もそう思っているのである＞」というシュライエルマッハーに対するバルトの最後的な言葉を看過して**、『カール・バルトの生涯』を著わしたことになるからである。**最晩年の『シュライエルマッハー選集への後書』**（**邦訳**『神学者カール・バルト』「**シュライエルマッハーとわたし　1968年**」）の翻訳者の蘇光正も、「訳者あとがき」で、次のように述べている――「私が今ここで述べたいと思うことは、ただ一つ、バルト研究者たちの間でその解釈が大きくわかれ、したがって大きな注目を浴びて来ている、『単に暗示という形で述べられた』バルト『**第三項の神学**』という発言についてである。これを全く無視しようとする者も（なぜなら、他の著書でバルトはそのことについて一言もふれていないからである）、**これをバルトの『転向』と誤解する者も、明らかにその前後数頁だけしか読んでいないのである**が〔例えば、ブッシュのように、また例えば、＜文責名＞も記さず、ブッシュ等の言葉だけに乗っかかって短絡的に「彼は晩年に自身の出発点である近代神学に回帰していると言えると記述した『カール・バルト――ウィキペディア』の記述者のように〕」、そういう研究者や牧師や著述家等が「必ずしも少なしとしない」、と。この指摘は、私が邦訳「シュライエルマッハーとわたし　1968年」を精読し理解した限り、全く正しい指摘なのである。神学における思想家・バルトの場合には、処女作『ローマ書』「第二版序言」、「第二版」以降、最晩年の『シュライエルマッハー選集への後書』（邦訳『神学者カール・バルト』「シュライエルマッハーとわたし　1968年」）まで、確かに時代と現実に強いられて、例えば区別を包括した単一性において「**神の神性**」の「主文章化」、「中心」化、「強調」という「方向転換」、あるいは逆に「**神の人間性**」の「主文章化」、「中心」化、「強調」という「方向転換」はあっても（それ故に、この「方向転換」は、「転向」とは全く違っている。何故ならば、時代と現実に強いられて「**神の人間性**」を「主文章化」した時にも、「**神の神性**」が堅持される概念構成になっているからである――「**神の神性において**、また神の神性と共に、ただちにまた神の人間性もわれわれに出会う」というように）、根本的包括的な原理的なところで、その深化と豊富化という神学的成果の時間累積の一貫した連続性が保持されているのである。

バルトの「最後の言葉」――それは、自己自身である神としての自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している

「失われない単一性」・神性・永遠性を本質としている「三位相互内在性」における「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間「**ただイエス・キリスト名だけ**」**である**。「**イエス・キリストは、わたしにとって、**いついかなる所でも……彼によって呼び集められ委託を受けた**教会にとって**――また、教会にゆだねられた音信（おとずれ）によれば、**全人類、全世界にとって、かつて在り、今在り、そして将来も在り続けたもうところのものにほかなりません**（それ以上でも、それ以下でも、それ以外のものでもありません）」。

1968 年、バルトは、「1969 年の初めに、スイス放送が計画した二回分の録音テープをとった」。その「一つの放送」で、バルトは、自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞と循環を繰り返している「自由主義者〔近代主義者〕をもって任じている人々よりも」、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚した＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持している「**ただイエス・キリストの名だけ**」**の奴隷として**、「**もっと自由主義的であるかもあるかもしれません**」と語った。さらに 11 月中旬のスイス放送では、バルトは、次のように語っている――「私が神学者として、そしてまた〔わざわざ意味ありげに政治に関わると声高に叫ばなくても、法的言語や政策的言語や納税や選挙等々を介して人は誰でもそうであるように、不可避的に政治に関わることを強いられてしまうという意味で、不可避的な〕政治家〔不可避的に政治に関わる者〕としてでも、語るべき最後の言葉は、恩寵といった概念ではなく、**一つの名前、イエス・キリストの名なのです**」、「私が私の長い生涯において努力してきたことは、いよいよ力をこめて、**この名〔イエス・キリストの名〕を強調し、そして、そこにこそ！　と語ることでした。この名前〔「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」〕以外のいかなる名前にも、救いはありません〔それ故に、平和もない〕**。そこにこそ、恩寵があります。そこには仕事と闘いへと向かうはげましがあり、共同体と仲間の人たちとの交わりへと向かうはげましがあります。**そこには、弱く愚かであった私がその生涯において試みたすべてのことがあります。しかしそれらすべても、この名**」――すなわち「**イエス・キリストの名において、なのです**」、と。

1968 年 12 月 9 日、月曜日、バルトは、「夜の九時頃」、「六〇年来真実に結ばれてきた友人のエドゥアルト・トゥルナイゼン」からの電話を受け、「暗い世界情勢について話し合った」。その時、バルトは、「しかし、意気消沈しちゃ駄目だ！　絶対に！　主

が支配し給うのだからね！」と言った。電話がかかってきた時、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」、「人はみな、神に生きる者だからである」という文章を書いているところだったという。バルトは、「その夜半のある時点に、誰にも気づかれずに死んでいた。彼は眠っているかのように横たわっていた。手は自然に、夕べの祈りの形に組まれたままだった」という、ネリ夫人が、朝に、「モーツァルトのレコードをバックに流しながら、彼をそっと起こそうとした時、このような姿で死を迎えた彼を見た」という。

詳論は下記で展開：
https://think-imagine-judge.blog.jp/
あるいは
https://christianity-church-barth.info/
この PDF 版は、上記のホームページやブログにある＜再推敲＞・＜再整理＞した論稿を、さらに＜再推敲＞・＜再整理＞して作成した論稿である。